

第Ⅰ章 序 言

1 東院庭園地区の概要

本報告は、平城宮東院庭園地区の1967年度から2000年度においておこなわれた発掘調査についての成果をまとめたものである。本遺跡は奈良県奈良市法華寺町に所在し、特別史跡「平城宮跡」の東南隅部分にあたる。地区の東側には法華寺阿弥陀浄土院が隣接する。北西には現在、宇奈多理座高御魂神社（以下、宇奈多理神社と略）が座す。本殿は室町時代のもので、重要文化財に指定されている。

平城宮の研究は江戸時代の林宗甫や北浦定政による先駆的な検討以来、長期にわたりおこなわれてきた。発掘調査は、1924・28・32年の断片的な調査を経て、1953年から本格的な発掘調査が開始され、1959年以降、現在に至るまで奈良国立文化財研究所、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所が通年継続的に調査を進めている。

東院地区の研究は国道24号線、奈良バイパスの建設を契機としている。京都―奈良間の南北交通路整備の一環として1961年に建設省が計画線調査を開始した奈良バイパスは、当時の研究成果を勘案しつつ、遺跡への影響を極力少なくする方針から平城宮東辺外側を通る東一坊大路を踏襲する形で路線を選定した。

この計画を契機に、該当する地域では平城宮の東辺の確認を視野に入れた調査が実施された（第22次調査、1964）。しかし、東一坊大路上と考えられた部分からの井戸、建物の検出から平城宮東辺の境界に疑問がもたれ、第29・32次調査（1966～67・1965～66）と調査を進め、第39次調査（1966）に至り、東面南門が南側に開いていることが明らかとなった。このことから、平城宮が当初想定されていた範囲より東側に張り出し部分をもつことが確定した。

続いて第44次調査（1967～68）により、張り出し部分の東南隅を確認し、平城宮の東辺が確定した。加えて、この調査では、景石や護岸施設、洲浜敷をもつ池の存在が確認され、張り出し部東南隅に庭園施設が存在することが明らかとなった。

第99次調査（1976）では園池の北半分が調査され、庭園構成の中心である園池の全容を掴むことができた。第110次調査（1978）では庭園北部が調査され、庭園の北限が確認された。第120次（1980）は庭園西部が調査され、庭園の西限が確認された。

その後、里道として使用されていた未発掘地域を中心に調査は続けられ（第245―2次調査（1994）、第271・276次調査（1996））、庭園地区の整備事業と併行して、重要遺構の再発掘や、園池についての詳細な検討もおこなわれた（第280・284次調査（1997））。

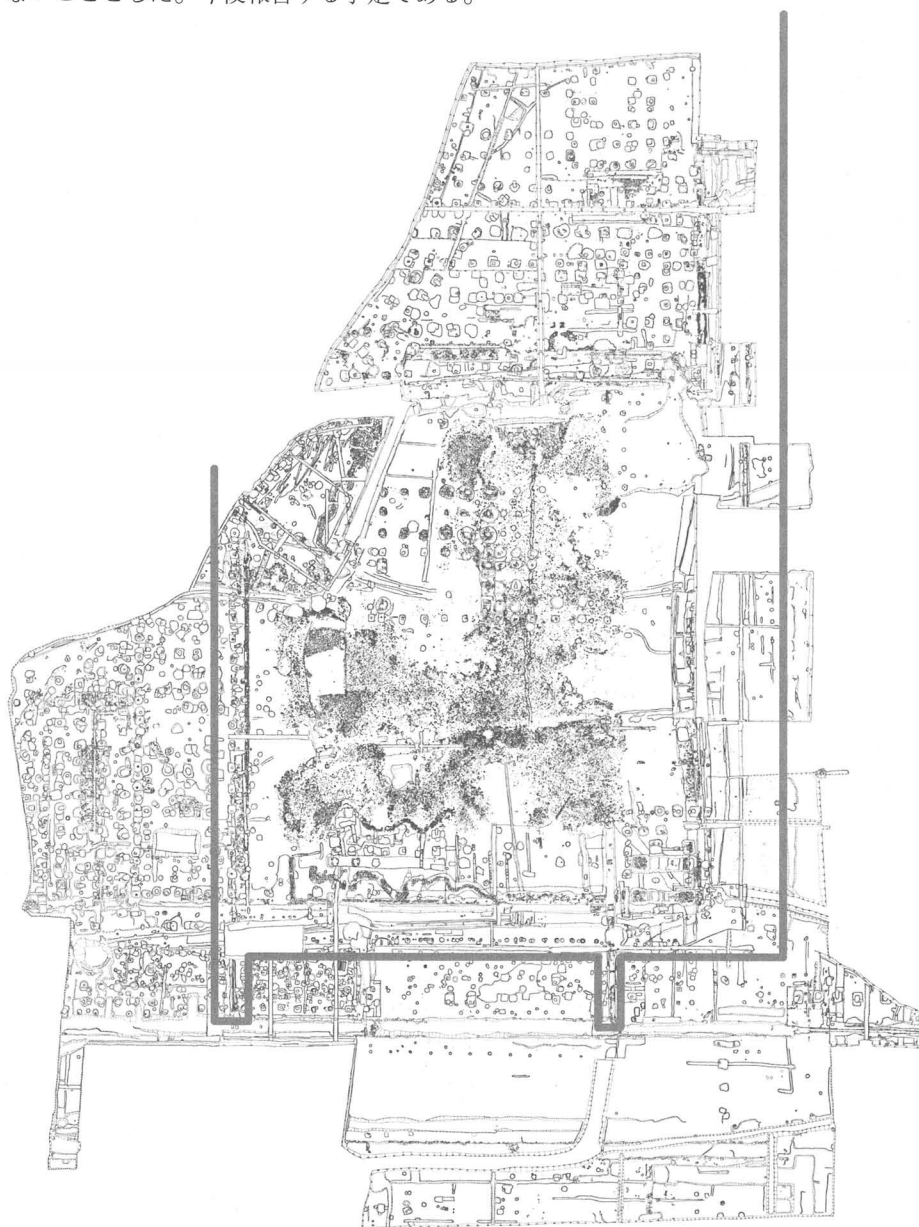
本地区は、発掘調査の成果をもとに『特別史跡平城宮跡保存整備基本構想』（文化庁1978年）に基づいた立体復原地区として史跡整備がおこなわれ、1998年には庭園の一般公開を開始し、2001年には隅櫓の復原も竣工し、一般に公開されている。

2 報告の範囲

本報告が対象とするのは、平城宮東院地区の東南隅部分にあたる。当該する位置には園池を中心として建物等が設けられており、庭園施設を構成している。そこで、本書ではここを東院庭園地区と呼称する。

範囲は園池SG5800を中心とし、東を東面大垣東雨落溝、西を南北塀SA9289、北を第110次調査区、南を南面大垣南雨落溝とした。

今回の報告で取り上げた調査回数と同じ調査において検出された範囲外の遺構には、二条条間路北側溝SD5200等、遺物量が多く、重要な遺構も含まれるが、一部を除き今回の報告には含まないこととした。今後報告する予定である。



—— 範囲

Fig. 1 報告対象地 (S = 1 : 1000)

3 報告書の作成

今回の報告は、奈良国立文化財研究所（現独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）平城宮跡発掘調査部が1967年度から2000年度に特別史跡「平城宮跡」東院庭園地区において実施した発掘調査の成果を報告するものである。

以下に該当する調査の責任者と直接の担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。

次 数	年 度	所 長	部 長	発掘調査担当者
第44次	1967・68	小林 剛	坪井清足	小笠原好彦 石松好雄 藤原武二
第99次	1976	小川修三	鈴木嘉吉	須藤 隆 狩野 久 佐藤興治 田中 琢 毛利光俊彦 清水真一 岡本東三 町田 章 中村雅治 光谷拓実 小林謙一 巽淳一郎
第110次	1978	坪井清足	狩野 久	中村友博 亀井伸雄 吉田恵二 中村雅治
第120次	1980	坪井清足	岡田英男	中村友博 鬼頭清明 山本忠尚 光谷拓実 巽淳一郎 上原真人 中村雅治
第245-2次	1994	田中 琢	町田 章	臼杵 勲 森 公章 小野健吉 山崎信二 杉山 洋 長尾 充
第271次	1996	田中 琢	町田 章	高瀬要一
第276次	1996	田中 琢	町田 章	内田和伸 川越俊一 井上和人 臼杵 勲 館野和己
第280次	1997	田中 琢	町田 章	内田和伸 川越俊一 井上和人 臼杵 勲 館野和己 蓮沼（平澤）麻衣子
第284次	1997	田中 琢	町田 章	渡邊晃宏 岩永省三 金田明大
第284次補	1997	田中 琢	町田 章	高瀬要一 平澤 毅
第302次	1999	町田 章	田辺征夫	岩永省三 西山和宏
第323次	2000	町田 章	金子裕之	井上和人

浅川滋男 安達厚三 阿部義平 綾村 宏 石井則孝 石橋茂登 伊東太作 井上直夫 猪熊兼勝 今泉隆雄 牛川喜幸 牛嶋 茂 内田昭人 小澤 毅 甲斐忠彦 加藤 優 加藤真二 加藤允彦 河原純之 岸本直文 木下正史 清田善樹 清野孝之 工楽善通 栗原和彦 小池伸彦 佐藤 信 佐原 真 沢田正昭 沢村 仁 清水重敦 菅原正明 高島忠平 高妻洋成 立木 修 田中 稔 田中哲雄 田辺征夫 玉田芳英 千田剛道 次山 淳 佃 幹雄 寺崎保宏 土肥 孝 中島義晴 中村一郎 西谷 正 箱崎和久 藤田盟児 古尾谷知浩 細見啓三 本中 真 本村豪章 松下正司 真鍋俊照 宮沢智士 宮本長次郎 三輪嘉六 村上昶一 森 郁夫 安田龍太郎 安原啓示 八賀 晋 八幡扶桑 山岸常人 山沢義貴 山下信一郎 横田拓実 横田義章 横山浩一 吉川 聡 渡邊康史
(京都大学) 田辺由美子、エアダリス、和田浩

第I章 序 言

本書の刊行に先立ち、1968年度から2000年度までは『奈良国立文化財研究所年報』（以下奈文研年報）、1976年度から1993年度までは『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（以下平城宮概報）、2001年度は『奈良文化財研究所紀要』に調査成果を逐次掲載した。2001年5月から2002年6月の間に計9回の検討会による討議をおこない、諸点の整理をおこなった。また、出土した木簡は『平城宮発掘調査出土木簡概報』6～34号に、墨書土器は『平城宮墨書土器集成Ⅲ』において概要を示した。

報告書の作成は1998年から開始した。作業は当初高瀬要一が中心となり担当したが、後、川越俊一が引継いだ。遺構関係の整理は平城宮跡発掘調査部の遺構調査室と計測修景調査室、文化遺産研究部の遺跡調査室があたった。遺物の整理は、木製品・金属製品・石製品類を考古第一調査室、土器・土製品類を考古第二調査室、瓦磚類を考古第三調査室が分担し、木簡と墨書土器については史料調査室と文化遺産研究部の歴史研究室が担当した。

本書の執筆担当者は以下の通りである。

第I章 金田明大・川越俊一 第II章 1 内田和伸 2・3 川越 第III章 1・2 A 高瀬要一 2 B
～D 西山和宏 第IV章 1 吉川 聡 2 清野孝之 3 A～M 金田 3 N 高橋克壽 4～9 次山
淳 第V章 1 西山 2 吉川 3 小野健吉 4 清野 5 金田 6 肥塚隆保・高妻洋成 7 光
谷拓実 第VI章 川越

報告書製作に際しての遺物の写真撮影と印刷用複製は牛嶋茂、中村一郎が担当し、杉本和樹、鎌倉綾、吉田幸子が協力した。また一部の写真は次の機関より提供頂いた。

橿原考古学研究所、奈良市教育委員会、桜井市教育委員会、明日香村教育委員会、仙台市教育委員会、防府市教育委員会

本報告の座標値は日本測地系（Tokyo Datum）に基づく平面直角座標系第Ⅵ系によるが、世界測地系（ITRF94）への移行にともない、適宜新座標を（ ）内に併記することとした。座標の変換は2002年に改測した三級基準点の変化量 $X+346.39$ 、 $Y-261.29$ を加えたものである。

また、以下の方々からは有益な御教示や協力等を得た。

早川和子、相原嘉之（明日香村教育委員会）、高橋照彦（大阪大学）、佐藤隆（大阪歴史博物館）、吉川義彦（関西文化財調査会）、尾野善裕（京都国立博物館）、上村憲章・小森俊寛・平尾政幸（京都市埋蔵文化財研究所）、畑中英二（滋賀県教育委員会）、亀井明德（専修大学）、木村泰彦（長岡京市埋蔵文化財センター）、金原正明（奈良教育大学）、池田裕英・武田和哉・三好美穂（奈良市教育委員会）、水橋公恵（三重県教育委員会）、山口欧志（奈良文化財研究所特別研究員）。

図面・挿図・表等は各執筆者が作成をおこない、以下の各氏の協力を得た。

東 仁美、今津朱美、上田素土子、宇野隆志、岡本由佳子、小倉依子、笠原由紀子、川竹恵梨花、北野陽子、高田美佳、高橋順子、土井智奈美、長尾明美、長谷川陽美、福田清美、丸山美和、南本 忍、向井祐介、森下しのぶ。

本書の編集は、奈良文化財研究所長 町田 章、平城宮跡発掘調査部長 金子裕之の指導のもとに、川越俊一がおこなった。